生きる力を養うための指導法を模索する教師の足跡

ドキュメント 進路指導 …… 3

DOCUMENT VOICE

●山形県立酒田東高校 ●熊本県立鹿本高校

生徒の視野を広げる体験学習

少しでも多くの選択肢の中から
自分の進む進路を選んでいくためには、
さまざまな世界に目を向けることが求められる。
目先のことに気を取られがちな日常の中、
生徒が未知の世界に触れることから
新たな意欲を持てるような取り組みに
挑戦する高校の事例を紹介する。

山形県立 酒田東高校

職業講演会や大学訪問で職業、大学を実感させる

山形県立酒田東高校進路指導主事
佐藤公子 Satoh Kimiko
酒田中央高校、酒田西高校を経て5年前に同校に赴任。先生自身も酒田市出身だが、東京で働いていたこともある。担当教科は英語。

1、2年生の保護者を対象としたPTA研修会といえば、進路指導や生活指導担当の教師が学校や生徒の状況を話したり、校外から講師を招いて入試動向・傾向を語ってもらうというのが一般的である。だが山形県立酒田東高校では昨年、山形県内の山村で暮らす鷹匠(たか)を招いて、彼の仕事ぶりについての話を聞くことになった。学生時代に動物を育てるという生き方に出合い、鷹匠になるまでの経緯を話す彼の姿に、感動して涙を流す父母もいたという。

「今の子どもたちは閉塞(そく)状況に置かれていて、自分らしい生き方を見つけるのが難しくなってきているように思うんです。そんな生徒たちに自分の生き方を構築してもらうためには、まずその両親にも、人間にはいろんな生き方・考え方があることを知ってもらい、広い視野を持ったうえで子どもを応援していく体制作りが必要なんじゃないだろうか。そう考えて、1、2年生の父母を対象としたPTA研修会については、これまでと内容を変えることにしました」

こう語るのは、同校で進路指導主事を務める佐藤公子先生。同校の教師が、時に生徒の保護者まで巻き込んで進路意識の醸成に力を注ぐ背景には、実は同校が置かれている地理的条件が大きく影響している。

酒田東高校がある山形県酒田市は、日本海に面する県北西部の町。江戸時代には西廻海運の要港として活気を呈していたこの町も、今では決して交通の要に当たる都市とはいい難い。県庁所在地である山形市までは少なくとも列車で2時間はかかるし、東京までは5時間以上を要する。

「酒田市には、大学も大手の予備校もないんです。また大学を卒業したあとに酒田に戻ってきて働いている人も、極端にいえば学校の先生とお医者さんぐらい。だから生徒は、大学というものをきちんとイメージできないし、また大学卒業後の職業についても思いが行き届かないんですね」

酒田東高校の生徒に職業希望を提出させると、1割以上の生徒が「教師になりたい」と書き込んでくるという。そして実際にそれだけの数の生徒が、教育学部に進学している。既に山形県内の教員採用状況は、かなりの狭き門になっているにもかかわらずである。佐藤先生はこれを「教師ぐらいしか、大学卒業後の進路として具体的に見える職業がないからではないか」と分析する。

「生徒は職業だけでなく、これからの人生をどう生きていくかということについても、あまり見えていないんじゃないだろうか。だから、単に生徒に大学研究、職業研究をさせるだけでなく、自分の生き方についてまで考えさせるような機会を数多く設定したいと思っています」

卒業生を招いて行われる「先輩たちに学ぶ」という講演会がある。酒田東高校では毎年秋に同窓会が開催されており、普段は全国各地に散らばって第一線で働いている卒業生たちが、このとき酒田市に戻ってくる。

「詩と故郷と自然」をテーマに、講演する卒業生。各分野で活躍する卒業生の話は、生徒の視野を広げ、学習意欲を向上させた。

「先輩たちの生き方は本当にさまざま。生徒が普段の生活の中では触れるチャンスが少ない職業に就いている方もたくさんいらっしゃいます。だったら、せっかく先輩方が一堂に会するのだから、なにか後輩たちに話してもらう機会を設けようということで始めたのが、2年生を対象にした進路セミナー『先輩たちに学ぶ』だったんです」

9年度の「先輩たちに学ぶ」は、11月8日土曜日の放課後、約2時間半に渡って行われた。講演会のテーマは「海外生活と仕事」「地方行政・農業・環境」「詩と故郷と自然」「医師の仕事と医学部への進学」の四つ。例えば「地方行政・農業・環境」は、大学卒業後に地元の農協で働き始め、今は市議会議員を務めている先輩の講演。また「医師の仕事と医学部への進学」は、医師として活動している先輩と看護婦として働いている先輩の2人による講演となっている。それぞれの先輩には、その仕事に就いた理由、大学での勉強が今の仕事にどのように結びついているか、後輩へのメッセージなどを語ってもらう。生徒は四つのテーマの中から自分の興味のあるものを選び、最初に先輩たちの話を聞いたあとは質疑応答に移っていく。講演会には、部活の練習試合などでどうしても来れなかった生徒を除いて、約8割が参加したという。

「中でも、生徒たちがこんな生き方があるんだと好奇心いっぱいに聞いていたのは『詩と故郷と自然』をテーマに語ってくれた先輩の話。この方は早稲田大を卒業後、酒田に戻り、ラー

酒田東高校

メン店を経営しながら詩作活動を行っているんです。そして東京から詩人を呼んで朗読会を開いたり、地域の中でもさまざまなことをやっている。『あんなふうに生きられれば素敵だな』って、生徒たちは目を輝かしていましたよ」

また「海外生活と仕事」の講演者は、アメリカの法律事務所勤務、カナダの自動車会社勤務、オーストラリアの日本語学校勤務の3人。3人とも、今回の同窓会のためには帰国できなかったので、講演と質疑応答はインターネットを介して行われた。インターネットは、先輩方の協力によって設置されたもの。このようにして生徒は、地元に根づいて生活している先輩から、世界で活躍している先輩まで、さまざまな生き方に触れることができた。

「生徒たちは先輩の話に、それはもう真剣に耳を傾けます。都市部の生徒を教えている先生には想像できないことかもしれませんが、普段刺激が少ない町に住んでいる分、なにか新しい情報に関しては驚くくらいに食いつきがいいんです」

酒田東高校では、同校OBの大学教授や助教授が、生徒たちに自分の専門分野に関する話をわかりやすく伝える「出張講義」が、年3回ほど開かれることがある。講義は全校生徒を集めて体育館で開かれるのだが、やはり私語を交わしたり、よそ見をしている生徒は1人もいないという。

職業を

表面的なものではなく、裏の大変な部分まできちんと生徒につかませたい。そんな狙いで実施しているのは、看護婦、理学療法士、作業療法士、介護福祉士、保育士（保母・保父）などの仕事を1日体験する「職場訪問」である。

対象となるのは、将来、医療、福祉、児童教育関係の職業に就くことを希望している1、2年生。年度によって違うが、だいたい10～20名の生徒が参加するという。体験先は、酒田市内にある病院や保育園などの各施設。協力依頼に当初は戸惑っていた施設側も今では理解を示してくれ、自ら協力を申し出る病院も出てきているという。

「例えば看護婦を1日体験する生徒は、実際にナース服を着て、プロの看護婦さんについてお手伝いをするんです。子どもたちって普段は患者としてしか、看護婦の仕事を見ていないんですよね。『人に優しく接することができれば、だれでも看護婦さんになれる』と思い込んでいたりする。だから、人には見えづらい看護職の大変な部分も、ちゃんと体験させてやってくださいとお願いしています」

この「1日職場訪問」を体験した生徒のほとんどが、その後も志望を変えることなく、医療や福祉関係職をめざすことになるという。

「本当は病院や保育園だけでなく、もっと職場体験ができる場が広がればいいんですけどね。でも酒田市の場合、どうしても訪問先が限定されてしまうんですよ。そこが大きな悩みですね」

未来への夢

を生徒たちに育（はぐく）んでもらうためのもう一つの大きな行事が、2年生の夏休みに行われる「大学見学」である。マイクロバスを借りて、東北大、新潟大、山形大で開かれているオープンキャンパスに生徒たちをつれて行く。酒田東高生の場合、やはり地理的条件から、学園祭などに参加して普段から大学の雰囲気を知っておくということは、なかなかできないこと。そのために同校出身者の中には大学入学後に、高校時代に描いていた大学生像とのギャップに悩むことになる者も少なくないという。

「生徒たちに、大学に対するイメージを早い段階からきちんとつかんでほしいと思ったんです。バスを借りてのオープンキャンパス参加は、4年ぐらい前から始めました」

「大学見学」を最初に実施した年には、佐藤先生が大学への申し込みやバスのチャーターなどを行った。また、東北大や新潟大で学んでいる酒田東高校出身の学生に連絡を取り、後輩のために学校案内をしてもらうようにお願いした。手間のかかる作業ではあったが、参加した生徒の反応は予想以上によかったという。

「生徒たちは、大学生としゃべれたというだけでうれしいみたいなんです。中には研究室に入り込んで、教授と話をしてきたという生徒もいました。その生徒は教授から『来年もう1年がんばってうちの大学に来なさい』といわれたらしく、とても喜んでいました」

オープンキャンパスというと、普通は3年生の参加が中心。だが佐藤先生は、早い段階に大学を体験させることが大事なのではないかと語る。

「3年生にもなると、大学の雰囲気よりも入試情報の方が気になるものです。でも2年生は、もっと純粋に大学を体験することができる。模擬授業などにも、積極的に参加します。大学進学がまだ切実ではない時期だからこそ、生徒たちに大学を触れさせたいんです」

酒田東高校

卒業生を招いた「先輩たちに学ぶ」。大学教授による「出張講義」。病院や保育園への「1日職場訪問」。そして東北大、新潟大、山形大へのオープンキャンパス参加。これらの行事を通じて、生徒の視野は少しずつ開かれたものになっていく。

「生徒によっては、高校卒業後は東京などの都会の大学に進んで、もっともっと自分を高めてみたいといい始める子も出てきます。いずれは酒田に戻って働くかもしれないけれど、さまざまな生き方をしている人がいる場所で、1度は自分も揉（も）まれてみたいというんですね」

保護者の中には「大学は地元の山形大に行けば十分」と考えている人も少なくない。そんな中で、生徒の意志と親の希望がぶつかる場面も出てくるという。

「でも私は、生徒が希望するなら都会の大学に行かせてあげたいと思うんです。視野を広めたいという生徒の思いは大切にしたいですからね。私自身そういう気持ちで指導しているのですから」

単なる大学進学指導、職業指導という枠を越えた生き方指導。佐藤先生はそういう指導スタンスで、いつも生徒に接している。

パ ソコンを活用したさまざまな情報収集も積極的に行われている。生徒にとっては異なる世界との出合いの場だ。

地 理的に見れば、生徒の情報収集において決して恵まれてはいない同校。だが、教師の工夫でそのハンディを克服した。

熊本県立 鹿本高校
大学に触れ 進路意識を高める バスツアーを実施

熊本県立鹿本高校進路指導係
井上裕子 Inoue Yuko
昭和32年生まれ。熊本県出身。国語科担当。八代南高校、天草高校に勤務。同校に赴任したのは昭和63年度。10年近く進路指導係を務める。

熊本県立鹿本高校進路指導主事
櫃原勤也 Tochihara Kinya
昭和27年生まれ。熊本県出身。生物科担当。熊本西高校、八代高校などを経て、平成7年度より同校勤務。昨年度から進路指導主事に。

鹿本高校に赴任してから初めて3年生の担任を持った年、櫃原(とち)勤也先生は「この高校の生徒の気質は、前の学校と比べるとずいぶん違うな」とひしひしと感じたという。

櫃原先生の前任校では、ほとんどの生徒が大学進学を希望しており、3年生にもなると生徒たちの意識も自然に受験へと向かっていったという。

だが鹿本高校の生徒は、いい意味でも悪い意味でもものんびり気質。同校があるのは、熊本県北部の温泉の町・山鹿市。熊本市まではバスで1時間以上もかかる山鹿市は、決して交通の便がいい方ではない。生徒たちは大学などの実状にほとんど直接触れることのないまま、高校生活を送ることになる。

「鹿本高校は、この地域での中核校に当たるんです。だから入学してきたばかりの1年生は、鹿本高校に入ったのだから将来はなんとかなるだろうと考えるんですね。そして2、3年生になっても、だいじょうぶだろうという意識が切り換えられなくて、結局どうにもならずに志望校を変更するというケースが多いんですよ」(櫃原先生)

こんなデータがある。鹿本高校の生徒は、入学時には約7割の生徒が国公立大への進学を希望している。だが例年の傾向として、2年次には国公立大志望者が約5割に減ってしまい、3年次には約4割にまで落ち込んでいくというのだ。

「1、2年生の間は、心理学や哲学をやりたいという生徒もそれなりにいるんですけど、3年になると結局は教師か公務員か看護婦志望に落ち着いてしまうんです。もう少し広い視野を持ってほしいなあと思いますね」(井上先生)

熊本県は全体に実学志向が強いといわれている。そこで子どもが哲学科や文学科を希望しても「そんな学科に行ってなにになるの?」と心配する保護者もいるのだという。

最近は、ユニークな学部・学科を志望する生徒も増えてきた。そんな生徒の学部・学科研究の資料も充実させている。

「生徒の側も、両親をきちんと説得できるだけの強い意志と見通しを持っていないんです。だからなんとなく親の示す道に従ってしまう。うちの学校の生徒が最後までがんばれないのは、どうしてもあの大学であの勉強がしたい、という思いが足りないからではないかという気がします」(井上先生)

平成7年度。

鹿本高校の1年生の担任となった教師たちは、生徒の進路意識を育てるためのさまざまな試みに着手することにした。井上先生も1年生のクラス担任の1人として、その試みに積極的に加わることになった。ちょうど7年度より同校では、英語コースと体育コースが設置された。これを機に指導体制を見直していこうという気運が高まっていたという。

「学力向上のための取り組みについては、早朝や放課後の課外授業、ドリル学習など、既にある程度システムができ上がっていたんです。でも進路意識の高揚という点では、まだまだこれからといった段階。先生同士の間で、あれはどうだ、これもやってみようというふうに、お互いにアイディアを出し合いながら少しずつ形にしていきました」(井上先生)

鹿本高校の普通科普通コースの生徒たちは、1年生の秋には文系コース、理系コースの選択をしなくてはいけない。いうまでもなく文理選択は、将来の進路と密接にかかわってくる。そこで先生方は1年次の夏から秋にかけてを、生徒たちに将来について考えさせる時期に当てることにした。まず夏休みには、自分が将来就きたい職業とそこにたどり着くまでのルートについてのレポートを書かせた。身近に自分の希望する職業に就いている人がいる場合には、聞き取り調査なども行わせることにした。

「ところが生徒たちは、このレポートを満足に仕上げることができなかったんです。中身を読んでみると、『2年生までには進路の目標をはっきりさせる』とか『とにかく勉強をがんばる』とか、具体性に乏しいんですね。2学期にはもう少し突っ込んだ進路研究をさせようと思ったのですが、とてもそのレベルには達していない。本格的な進路研究までの間に、もう一つなにかしかけなくてはと思いましたね」(井上先生)

そこで作り出されたのが「夢を描こう」と題された1枚の書き込みシート。シートは20代、30代、40代と区分けされており、例えば「27歳で大学時代の同級生と結婚」「40歳で自分の会社を起こす」というふうに、80歳までの自分の人生のプランを自由自在に書き込めるようになっている。だが夢中になって取り組む生徒がいる反面、夢を具体的に描けない生徒がいた。

「女の子の場合、『28歳で寿退社』以降は全く予定が立てられない。男子生徒も『大学卒業後に就職』以降が浮かばない。そんな生徒が半数ぐらいいました。ちょっとショックでした。でも自分の将来像を描くなんて、一朝一夕にできることではありませんよね。生徒に進路について現実を知った途端に粘らずにあきらめてしまうんですね」(櫃原先生)

「志望は高いんですが現実を知らない。そして現実を知った途端に粘らずにあきらめてしまうんですね」(櫃原先生)

一方、鹿本高校で国語を教えている井上裕子先生も、3年生を担任する度に気になることがあった。生徒たちの進路選択の幅がとても狭い

生徒の視野を広げる体験学習

鹿本高校

て考えさせる機会を少しでも多く持たせることによって、積み上げていくしかないと考えることにしました」（井上先生）

「夢を描こう」のあとは、「職業調査」を実施した。進路関係の資料を1か所に集め、希望職業の仕事内容、どうすればその職業に就けるかといったことを調べさせた。やはり書くのに苦労していた生徒は少なくなかったとはいうものの、これまでになく熱心に書き込んでいる生徒も見受けられた。そんなふうにして地道に一歩一歩、生徒たちの意識を高めていった。

「夢を描こう」

や「職業調査」によって鍛えられた生徒たちは2年生に進級した。井上先生も持ち上がりで2年生を担当することになった。

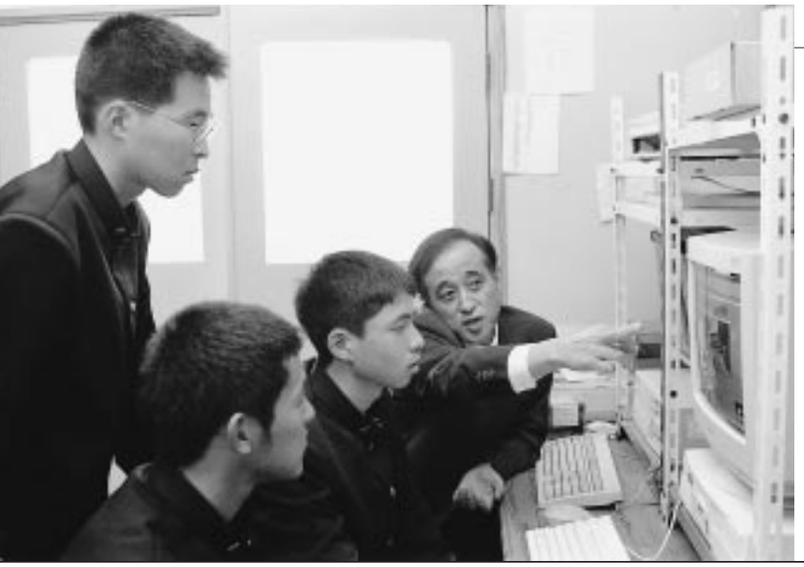
「先生方の間で、1年次に行ったさまざまな試みを、2年次ではどのように継続させようかという話になったんです。1年生の間は頭の中で将来をイメージさせたけれども、2年生ではもっと直接的な刺激を生徒に与えたい。ちょうど中だるみの時期ですからね。そこで夏休みを利用して進路学習バスツアーというイベントを実施することにしました。うちの高校の生徒は、生の大学の姿にほとんど接したことがないんですよ。熊本市内の大学に行くにもバスを乗り継がなくてはいけないから、オープンキャンパスにもなかなか参加しようとしない。そんな生徒たちに大学を体験させればきっと意識も大きく変わるに違いないと考えたんです。実際に1年生の夏休みに慶応大の見学に行った生徒がいて、その子は2学期のスタート時から目の色が違っていましたからね」（井上先生）

鹿本高校には就職希望の生徒も少なからずいる。そこで体験コースは①大学（文系）・短大コース②大学（理系）コース③就職・公務員・専門学校コースの三つに分けられた。①コースは熊本県立大と熊本学園大②コースは九州東海大宇宙情報センターと熊本工大③コースは税務大学校や本田技研工業の工場などを訪れることになった。またツアーに参加しない生徒も、各大学が独自に実施しているオープンキャンパスに参加するか、1日看護体験に参加することとした。

「バスツアーの企画が持ち上がったのは、6月初旬です。実施したのが7月30日でしたから、かなり急でしたね。大学に対して高校の側から見学を申し込むなんて、もちろんどの先生も初めての体験。最初は受け入れてもらえるか心配でした。ところが連絡を取ってみると、意外に好意的なんですよ。きっと大学の側も『少しでも多くの高校生にうちの大学を知ってほしい』ということなんでしょうね」（井上先生）

一つの高校が、直接大学に連絡を取って見学したいと申し出る。なにか大変な労力がかかるように想像しがちだが、鹿本高校の場合は意外とスムーズだった。

「学年主任や進路係を中心として、2年生の先生同士の協力体制が整っていたということが大きかったんでしょうね。1人の先生だけに負担がかかっていたら、きっと実現できなかったでしょう。また訪問先として、あまり規模が大きくない、迅速に対応してくれそうな地元大学を選んだこともよかったと思います」（井上先生）



進路指導室のパソコンで各大学のホームページを見る。自分の将来を考えることに生徒たちは積極的になった。

2年生

を乗せたバスは7月30日、それぞれの目的地に向かった。訪問先では大学と学部に関する説明を受けたあと、施設見学を行うことになる。いわゆる普通のオープンキャンパスと変わりないのだが、生徒の中には思わぬ"自主性"を発揮する者もいる。

「熊本県立大での話なんですが、研究室を訪ねて、教授とお茶を飲んできたという生徒がいたんですよ。高校生にとって大学教授なんて、雲の上の存在ですよね。そんな方と話ができたものだから感動して、顔を紅潮させながら『僕は絶対この大学に進学します。がんばって勉強します』と話していました」（井上先生）

大学図書館の中に入り込んで「私は本の海の中をもう少し漂っていたいです。先生、大学図書館って教養って感じがしますよね」と感激し、帰りたくないといい始める生徒もいたという。

わずか1日の体験だが、大学の空気に触れることで生徒の意識は大きく変わった。進路学習バスツアーは、好奇心いっぱいの年代である生徒たちにとって、大きな収穫をもたらした。

「1年次から自分の将来について考える場を設けたからこそ、2年生のバスツアーでも生徒は能動的に動くことができたのだと思います。また生徒の中には『専門学校を志望していたんですが、イメージと違いました。ゼロから再検討です』という子もいました。でもそういった発見も大切です。バスツアーは、自分が本当はなにがやりたいのか、見極める場でもありますからね」（井上先生）

進路学習バスツアーは、訪問先が若干変わったとはいうものの9年度も引き続き行われた。そして8年度のツアーを体験した生徒たちは、今春、鹿本高校を巣立っていった。

冒頭に登場した櫃原先生は、9年度から進路指導主事に就いているが、今春卒業した生徒たちを次のように評価する。

「以前は3年次になると、約4割にまで減っていた国公立大志望者が今春卒業生に限っては5割5分をキープしたんです。自分の意志を最後まで貫くという点では、バスツアーなどを体験した生徒たちは確実に粘り強くなっています。3年間の進路学習で進路を絞り込み、実現させる方策が学べたのだろうと思います」

生徒たちの志望大・学部に対する意識も変わってきた。井上先生は次のように語る。

「3年生になってからも積極的にオープンキャンパスに足を運んでいましたね。遠く広島や東京の大学を訪ねた生徒もいたようです。そして生徒に受験校の志望理由を聞いても、ここの大学・学部ならこういうことが学べるんです、ときちんと説明できるようになりました。センター試験で少々失敗しても、『自分の目標なんだから』とあきらめずに第1志望校を受験、合格する子も20名近く出ました」

なんとなく周囲の意向に従っていたかつての生徒像とは、確実に違う意志を持った生徒が育ちつつある……2人の先生はそう感じている。

大学生の姿に接したことがほとんどなかった鹿本高校の生徒たちは、大学の空気に触れ、大きく変わったという。